

# 富士のさと イングリッシュキャンプ

令和5年9月16日(土)～9月18日(月・祝) 2泊3日

## ○目的

米軍海兵隊との交流や、英語での体験活動を通して、多くの人と英語でのコミュニケーションをとっていく。その中で英語の難しさ、自国文化(言語)との違い、英語を伝える・聞き取ることができたときの喜びを体験的に感じることで、英語を使うことへの興味・関心を高めていくことを目的とする。

## ○参加者

小学5・6年生 34名(男子:15名、女子:19名)

## ○本事業の特徴

- ・在日米軍海兵隊キャンプ富士諸職種共同訓練センター(以下、「キャンプ富士」という)と連携し、3日間を通して海兵隊員とともに活動する。
- ・全体を通してのグループ分けではなく、活動に応じてグループを作ることで、より多くの参加者同士の関係性を構築させる。

## ○事業の内容

### ・1日目

#### (1) アイスブレイク(交流ゲーム)

英語を使ったゲームを通して緊張をほぐし、お互いのことを知ることができた。また、海兵隊員が考案したゲームを行い、交流することができた。

#### (2) イングリッシュウォークラリー

海兵隊員が英語で指示を出し、参加者はそれを聞き取ってコースを進んでいく形式のウォークラリーを行い、英語を使うためのウォーミングアップの機会になった。

#### (3) 交流タイム①(ビーチコートプログラム)

ビーチコート内で海兵隊員や参加者同士が自由に身体を動かし、交流を深めた。

#### (4) 野外炊事(BBQ、焼きそば)

グループで協力して夕食を作るとともに、翌日のダッチオープンでの調理に向けて、野外炊事の流れや動きを確認する機会になった。

### ・2日目

#### (1) キャンプ富士訪問

憲兵隊や消防署にはどのような設備があり、どのような仕事をしているのかを見学した。また、レストランや売店にて英語で買い物を行い、異文化体験を行うことができた。



イングリッシュウォークラリー



交流タイム①



キャンプ富士訪問(消防署)

(2) 野外炊事（ダッチオーブンを使ったローストポーク、ミートソーススパゲティづくり）

特殊な調理工程のあるダッチオーブンを使用し、グループで協力して夕食づくりを行った。

(3) キャンプファイヤー

フォークダンスやレクリエーションを行い、交流を深めた。サイコロトークを実施し、キャンプの思い出や海兵隊員のことについて語り合う時間となった。

### ・ 3日目

(1) 交流タイム②（発表原稿づくり）

3日間の思い出や頑張ったことを発表するために、海兵隊員と一緒に英語の文章作りを行った。その中で、わからない単語を確認することや、発音の仕方を教えてもらう姿が見られた。

(2) メモリータイム

自分で考えた文章を、ペアを交代しながら繰り返し繰り返し個別に発表し合い、英語で話すことへの自信をつけた。その後、一人一人が全体の前で堂々と英語で発表することができた。



野外炊事



キャンプファイヤー



メモリータイム

### ○参加者の声（事後アンケートより）

- ・最初は英語がわからなかったが、楽しく学ぶことができた。
- ・友達がいっぱいできて、海兵隊員の皆さん達とも楽しくお話しできた。
- ・ゲームや食事作り、キャンプ富士見学など色々な活動を体験でき、とても楽しく勉強になった。

### ○アンケート結果の考察

事前と事後のアンケートから、「外国人と交流をしてみたい」「外国に行ってみたい」の項目で向上が見られた。海兵隊員とのコミュニケーションにおけるネイティブな英語を体験したことや参加者同士で英語による交流を図る中で、「できた」「できなかった」ことを多く体験したことが、自分たちと違う文化や言語への興味・関心を育んだと考えられる。

### ○成果・課題

○本事業は全体を通しての班編成を行わずに実施した。参加者の声として、「全く知らない人たちと交流ができた」「同年代の友だちがたくさんできた」とあることから、固定化された集団ではなく、広くコミュニティを形成していたことがうかがえる。参加者同士で信頼関係を形成することができたため、いろいろな人との英語での会話に挑戦する様子が多く見られた。

○前年度の反省点を踏まえ、SNS・ホームページでの広報に加えて、地元の新聞に記事掲載を行った。ネット媒体は県外の参加者からの応募に効果があり、地元の新聞への記事掲載は近隣の参加者からの応募に効果があった。その結果、静岡県内外の様々な地域から定員を上回る参加者を募ることができた。

●組織キャンプとは違った特殊な運営をしていく中で、担当スタッフ・ボランティア間で事業目的や到達目標などのビジョン共有はできていたが、スタッフの細かな配置やプログラムごとの動きなど、臨機応変に動くケースが多かった。班編成を行わない取り組み自体は、事前に想定した通りの効果を得ることができたため、今後は担当スタッフ・ボランティアの配置や動きを含めて安定した事業運営ができるよう検討していきたい。